

## 4. 地域活動

(キャンパス周辺地域での活動)



## 学生からの報告

### 4.1 横浜地域活動

#### COT (Center of Totsuka)

活動場所 とつか区民活動センター、ふらっとステーション・とつか など

活動内容 学生と地域住民の世代間交流、地域活性化

参加人数 学生 17 人 (内、学生メンバー 3 人)

とつか区民活動センター、ふらっとステーション・とつかスタッフ若干名

秋のスポーツレクリエーションフェスティバル運営、冬のとつかお結び広場出展のほか、今年度からは子どもたちの居場所づくりを目指した「わくわくプロジェクト in ふらっとステーション・とつか」を始めた。

「わくぷろ」では世界のランチ作り、手形アートや暗闇朗読会など、普段ではできないことを楽しんだ。

(学生メンバー 社会学部社会学科)



### 大木農園

「大木農園」は、横浜地域で有機農業をおこなっている大木敏幸さんのもとの、農業の応援をする活動である。活動は 2009 年から始まり、2015 年度で 6 年目となった。2009 年、明治学院大学は「地産地消」を促進するため、横浜地域に農地を持つ大木さんと連携していくことを決めた。そのつながりが、学生と大木さんとのつながりに発展し、「大木農園」が誕生した。私は 2013 年度から「大木農園」の担当になり、既に 2 年以上続けている。最初の頃、私は農業についての知識を深める、という所にのみ目を向けていた。しかし、年間で農業以外のことも学んできた。今回は、少し違う視点からこの活動を振り返り、今後の課題について述べたい。

今年度は、ほぼ毎週日曜日に活動した。2013 年度、2014 年度は月に 1、2 回であったが、2015 年度になって活動回数は増えた。担当 1 人の日が多かったが、月 1 回程度は、一般の学生も参加してくれた。作業は草刈り、枯れた胡瓜やトマトの片付け、ジャガイモの収穫等、今年もさまざまであったが、イチゴハウスでの作業が中心であった。

ここで、今まで通りなら、「野菜について知れた」「農業の大変さについて知れた」ということを述

べたであろう。頻繁に活動してきたので、農業に関する知識を深められたのは確かである。しかし、私はそれだけでなく、人と関わるのがどのようなことなのか、少しではあるものの、分かったように思う。私は今まで、人によって態度や話題を明らかに変えるのはあまり好まれないことだととらえていた。同じように考えている方も多いかも。だが、大木さんと親しくなっていく中で、そうではないと気づいた。大木さんは私と何世代も離れている方で、関心事の範囲が大きく異なっている。友人や他の大人と話している内容と同じことを話しても、なかなか通じ合えない。相手がどんなことに関心があるのか、どんな話し方が適切なのか、と考えていく必要があった。「大木農園」で私は、人が人と関わる時、その相手が誰かによって、話し方、話題さえも変えるのだと実感した。人はそうして上手くコミュニケーションをするのである。人との交流は、自分に新たな変化をもたらす素晴らしいものだと思う。

長く「大木農園」を続けてきた。私もいつか大学を卒業する。その時点で大木さんと私とのつながりが途切れてしまう可能性が高い。つながりを作っては途切れさせる、ということを繰り返しても人間関係は広がっていかない。作ったつながりを維持する工夫をしていくことが今後求められる。

(学生メンバー 文学部英文学科)

## MG 子ども

活動場所 東戸塚 子育て支援拠点 とつとの芽

活動内容 地域子育て支援拠点にて、子どもたちとのふれあい

参加人数 学生 19 人 (内、学生メンバー 5 人)

昨年度に引き続き、今年度も東戸塚地域子育て支援拠点「とつとの芽」で活動をおこなわせていただいた。主に、広場に入り子どもたちやその保護者たちとの交流をおこなった。また、それだけではなく、子どもたちの前に立ち、大型絵本の読み聞かせや子ども夏祭り、クリスマス会のお手伝い、舞岡公園でおこなわれた野遊びに参加した。子どもたちやその保護者たちの中に入ると、時代とともに子育てのかたちに変化していることを感じた。地域内の関わりが希薄になり、実家からも離れてひとりで必死に子育てしている方も少なくない。また、現在では、小さい子どもを抱いた経験を持たずに親になる人は半数を超えるそうである。そのような中で、子育て世帯を支える役割として、地域子育て支援拠点は存在するのである。ボランティアという機会を通し、非常に貴重な経験をすることができたように思う。初めてボランティアに参加する学生が安心して参加できるようにしていくこと、広報の工夫が来年度への課題である。

(学生メンバー 社会学部社会福祉学科)

## 倉田小学校

活動場所	倉田小学校周辺
活動内容	諸行事のお手伝い
参加人数	学生9人（内、学生メンバー6人）

2015年度は6月1日・10日、10月28日の田植え・稲刈り体験学習と、10月25日の運動会、11月14日の地域住民の防災訓練に参加し、主に小学校教職員のお手伝いをおこなった。いずれの活動も5人程度の学生（うち23人は一般学生）で参加した。活動の中で強く感じたことは、児童の有り余る元気さと、ボランティアに寛容で、活動のたびに明学生を温かく見守ってくださった教職員の優しさである。倉田小学校により貢献したいと活動のたびに感じた1年間であった。来年度以降の課題として、当ボランティアセンター横浜地域活動側からの企画発案を活発におこなっていく環境づくりがあげられる。2015年度の活動は、小学校からの要請を受けて明学生が活動をおこなう、といった方式を採っていた。そのような活動形態では創造性に乏しいと言わざるを得ない。「明学生だからこそできるボランティア」という強みを見出し、能動的にボランティアを展開できるような団体を目指し、これからも活動に励んでいきたい。

（学生メンバー 社会学部社会学科）

## MGVA (Meiji Gakuin Volunteer Association)

活動場所	横浜キャンパス 420 教室
活動内容	ボランティアサークルの広報活動の支援
参加人数	学生メンバー4人

本学には数多くのボランティアサークルが存在するが、相互に協力し、ボランティア活動を展開しているとは言いがたいのが現状である。この現状を打破すべく、MGVA (Meiji Gakuin Volunteer Association) を横浜地域セクション内で立ち上げた。4月にはボランティアサークル合同説明会を開催した。この説明会は新入生向けの企画であるとともに、ボランティアサークルがお互いの活動について知り、交流を深めるといった意味合いも持っている。13のボランティアサークルが参加、新入生も3日間で150人ほどが来場し大盛況であった。イベント終了後、当セクションの活動にボランティアサークルから一般の参加者が来たり、ボランティアサークルを兼任する明学生が増えたりと、同イベントは大いに意義のある催しであったと言える。説明会の宣伝が新入生に伝わりづらかった（来場した多くの新

入生は、説明会前にボランティアセンターを実際に訪れ、情報を得ていた) という反省点があるので、SNS やポータルヘボン等のメディアを有効に活用し、2016 年度も準備を進めていきたい。

(学生メンバー 社会学部社会学科)

## とつか宿場まつり

活動場所 戸塚駅、戸塚区役所

活動内容 イベントの運営

参加人数 学生 14 人 (内、学生メンバー 8 人)、当センター職員 2 人

とつか宿場まつりのボランティア活動をおこなうにあたって、事前にとつか宿場まつり実行委員会の方から戸塚宿について学ぶ勉強会をおこなった。

事前準備として、戸塚区にちなんだ問題で構成されたクイズラリーや、戸塚区のゆるキャラ・ウナシのぬり絵はがきなどといった、戸塚区にまつわるものを交えながらも、このイベントを楽しんでもらえるような企画を発案し実行した。

当日は、学生メンバーがクイズラリーやぬり絵はがきのブース、受付を担当した。地域の方々を会場へ誘導するために企画したクイズラリーではさまざまな年代の方々に、塗り絵では多くの子どもたちに参加していただき、イベント参加のきっかけ作りがうまくいき、多くの展示品を見ていただくことができた。

今年から始まったイベントということで円滑には企画・運営できなかったが、学生メンバーが企画したものが成功し、イベントを盛り上げることができ、とてもやりがいのある活動であったので、今後も関わっていきたい。

(学生メンバー 法学部法律学科)

## 4.2 白金地域活動

### 高輪いきいきプラザ

#### パソコン入門サロン

活動場所 高輪いきいきプラザ

活動内容 高齢者を対象としたサロンの企画と運営をおこなう

参加人数 学生メンバー2人、高輪いきいきプラザ職員4人、地域ボランティア1人

2015年10月より、高輪いきいきプラザと明治学院大学の学生で、高齢者サロンの企画と運営に取り組んでいる。私たちは60歳以上の港区民を対象とした「パソコン入門サロン」を立ち上げた。パソコンを保有しているものの、文字の入力方法を知らない方が多いという現状を知った。このことを踏まえ、サロンの内容は参加者がパソコンのキーボードを用いて文字を打てるようになり、最終的にはメールの本文を作成できるようになることを目標とした。2016年2月に第1回を開催することが決定し、宣伝用のポスターや参加者に配布する資料などの作成をおこなうなど準備を進めている。

また、今後もこのサロンを継続させるためには学生ボランティアを増やすことが課題となっている。

(社会学部社会福祉学科)

#### 折り紙サロンボランティア

活動場所 高輪いきいきプラザ

活動内容 折り紙を通して高齢者の方々の脳の活性化、交流を図る

私は、高輪いきいきプラザでおこなわれている折り紙サロンのボランティアに参加させていただいた。高齢者の方々と一緒に折り紙を折ることを通して、その方たちの脳の活性化とともに世代間交流をおこなっている。第一土曜日と第三土曜日の月二回開かれ、高輪いきいきプラザの敬老室に地域の方が10名ほど集まって活動している。

折り紙サロンでは、その季節に合った折り紙のレシピを折っている。利用者と折り方が分からないところを協力して折ったり、会話を楽しみながらレシピを完成させたりした。楽しく、熱心に折り紙を折る姿がとても印象的であった。そして、初めて参加させていただいた時から温かく迎え入れてくださり、一緒に折り紙を折る空間は、和やかでほっとするような温かさがあった。また、利用者のお話を直接聞くことができ、このような健康づくりの場の大切さや必要性を実感した。

今後も利用者の方々をたくさん笑顔にすることを目標とし、その方たちの元気につながるような活動を続けていきたい。

(経済学部経済学科)

## MG パール

私たちの活動はマレーシア・ボルネオ島の分断された森をつなぎ、野生動物が自由に繁殖し、絶滅の危機から守ることを目的としている。かつては地上生物種の70%が生息と言われていたボルネオ島だが、1980年代からパーム油採取のために油ヤシのプランテーション開発が進められている。生物多様性は破壊され、特に野生のオランウータンは絶滅の危機にある。そこで、ボルネオ島の淡水パールを使用した手作りのアクセサリーを販売し、その売り上げをNPO法人ボルネオ保全トラスト・ジャパン(BCTJ)がおこなう「緑の回廊プロジェクト」という、プランテーションの土地を購入し、新たな森を確保する活動に寄付している。自らが問題意識を高め、アクセサリーを通して、この現状が身近な問題であることを多くの人に伝えるために活動している。

白金と横浜の両キャンパスでそれぞれ週に1～2回、昼休みに活動した。毎週の活動ではイヤリング・ピアスなどのアクセサリー作りをおこなった。売上金は50%をBCTJに寄付、30%をイベント出店費、20%を材料費というように割り当てている。今年度の合計売上は17万3,400円であった(表1)。その内、寄付金額は8万6,700円であった。

今年度は「伝える」ことを重視した。長期休暇中はボルネオ島の環境問題の理解を深めるために勉強会をおこない、昨年度の反省点である説得力のある伝え方の不十分さを改善できた。お客様に商品を買っていただくのではなく、ボルネオ島の環境問題を理解していただくことに努めた。その結果、関心を持っていただくことができ、自然と商品の売り上げにもつながった。

また、デジタルサイネージを使用した新たな発信方法を試みた。その結果、活動に見学に来てくれる学生がいたため、効果はあったと思われる。今後はどのように伝えるかをさらに吟味し、さまざまな方法でボルネオ島の問題を伝えていきたい。

4月	観桜会	25,600
5月	戸塚まつり	34,100
6月	キャンドルナイト	9,000
7月	板橋熱帯環境博物館	
春学期	生協販売	11,520
10月	よこはま国際フェスタ	52,900
11月	白金祭	37,400
秋学期	生協販売	2,880
	合計	173,400

(学生メンバー 心理学部心理学科)



## 日本ユニセフ協会

### 「子どもと先生の広場」ニュース記事抄訳

活動内容 日本ユニセフ協会 HP「子どもと先生の広場」における小学生向けニュース記事の作成

活動期間 2014年6月～現在 1記事/月

日本ユニセフ協会が運営するウェブサイト内の「子どもと先生の広場」では、小学生向けにユニセフの世界のニュースを掲載している。私たちの活動は、大人用の記事を小学生が読んで理解できるように文章を書き直す作業だ。抄訳する記事を選ぶときには、子どもたちに知ってほしいことや、すでに掲載されている記事とのバランスを考え、全体のニュース記事に偏りが出ないように、日本ユニセフ協会の職員の方と相談しながら決める。しかし、いざ抄訳をしてみると、なかなかスムーズに書くことができない。自分が当たり前のように使っている漢字や言葉が、小学生には理解できないものだと気づく。そして代わりになる言葉を頭の中から見つけ出す。その作業を何度も重ねて、小学生にとって読みやすく、理解しやすい文章を作っていく。完成した原稿を日本ユニセフ協会に提出し、添削された記事がウェブサイトに掲載される。添削されているとはいえ、自分が書いた文章が多くの人の目に留まるところに公開されると、改めてその責任の大きさに気づかされると同時に、自分の言葉で「伝える」ということの楽しさを感じる。

(学生メンバー 文学部英文学科)

### 「ユニセフ One Minute Video コンテスト」学生事務局

活動内容 「ユニセフ One Minute Video コンテスト」の運営

活動期間 2015年7月上旬～8月下旬 (11月に反省会開催あり)

参加人数 学生メンバー4人

「One Minute Video」とは、1分間の映像制作を通して、世界中の子どもたちが自分たちのメッセージを世界へ向け発信し、自己表現力を養い、国籍を超えて興味や意見、夢や希望を分かち合う活動である。日本では、日本ユニセフ協会が2010年から「One Minute Video」の取り組みを開始。その一環で大学生と協力し、「One Minute Video コンテスト」を開催している。



4回目の開催となる今回は、「すべての子どもにやさしい世界を ～みんなの約束 子どもの権利条約～」をテーマに作品が募集され、本学含め4大学から集った18名の学生メンバーが、応募された合計500作品の審査から表彰式の開催に至るまでの運営をおこなった。今回、本学学生は初めての参加であった。他大学生との連携などは難しく、課題も残ったが、今後も継続して携わり、プロジェクト推進を目標に掲げたいと思う。

(学生メンバー 経済学部経営学科)